Bull. Fac. Life Env. Sci. Shimane Univ., 19：1, September 30, 2014

巻　頭　言

― 生物資源科学部のミッション ―

生物資源科学部長　荒瀬　榮

Dean, Prof. Dr. Sakae ARASE

毎朝，NHKの朝の連続テレビ小説「花子とアン」を見て出かけるのが今の日課である．原稿用紙に向かった主人公“はな”が想像豊かに鉛筆をスラスラと走らせながら童話を書き上げていく姿を見ると，物語とはいえ巻頭言１頁書くのにも苦労している我が身としては大変情けなくもある．過去２編の巻頭言でネタを使い果たしており，何を書こうかとあれこれ考えれば考えるほど迷路に迷い込んだように題材すら思い浮かばない．先ほどの“はな”に限らず作家と呼ばれる人々は泉が湧き出るように400字詰め用紙に一日何十枚も書かれる．作家さんの頭脳はどうなっているのだろうかとそのメカニズムを知りたくなるときがある．先日，TVで立花隆さんの住まいが紹介されたが，蔵書が５階建て住宅の部屋全てに足の踏み場も無いほど納められており，ここから集めた知識，情報を基に多彩なジャンルの書物を出版出来ることを可能にしていることがよく分かった．大阪布施市にある司馬遼太郎さんの自宅が公開されているので見学に行ったことがあるが，ここも立花さん宅同様，書籍の山であった．司馬さんの書によれば，芸術家など特別な能力を持った人以外は，若いときに得た想像力，空想力それと創造力は，年と共に剥がれ落ちていくと書かれている．作家は，膨大な書籍により３つの力をいつまでも維持していることになる．３つの力などとうの昔に剥がれ落ちてしまっているとはいえ，役目柄その責務を果たさなくてはならいと重い筆を取っている．

昨年は，国立大学法人の第２期中期目標・計画が残り２年となる中で文科省より示された「国立大学改革実行プラン」の目玉であるミッション再定義が行なわれ，生物資源科学部は農学分野の「ミッション再定義」で大いに悩まされた．島根大学ならではの特色ある組織的研究を示すことが求められた．なかなかすんなりとはまとまらなかった．地域に根ざした研究がないことと，組織的研究がないことが原因である．やはり文科省との意見交換では厳しくたたかれてしまった．文科省から特色が示されない分野もあったことより，島根大学の農学分野における特色や強みについての提示があるのだろうかという一抹の不安を持っていた．しかし，「汽水域の生物資源の利活用」と「高齢化社会における豊かな農山村の創造に寄与する学際的研究」が示された．個人的には，「特色が無い，無い！」と言われながら地域の状況を把握した適切かつ落ち着きの良い2つの柱が示されたと思う．ミッション再定義に関する一連の作業をしながら感じたことは，地方大学でありながら地域に根ざした組織的研究を行なっていなかったことである．元来，研究は個々が必要に応じて共同研究を行なうことを主流としてきた．しかも，「地域」を意識した組織的研究ではなかったように思う．少子化時代，18歳人口の大幅な減少が迫り来る中で，学部そのものの存立も危ぶまれる中で，地域と全く無縁とは言わないが，無縁に近いこれまでどおりの研究スタイルを続けていたのでは，「生物資源科学部がなくなる事態が起こったら，島根県をはじめとする自治体等は存続のための反対運動や陳情をしてくれるだろうか？」と思う．

「ミッション推進室」を創設し，松江市，浜田市および飯南町をモデル地域として２つの柱を推進するための地域課題を先生方にお願いしたところ，全ての先生方から提案して頂いた．この計画をモデル地域となる自治体へ説明に伺うと非常に好意的かつ協力的であり，今後の取組みの重要性を感じる．大学は，自治体や関係機関等と包括連携協定を結んでいるが，我々の地域に根ざした様々な研究はこれに応えることになると考える．しかも，持続的に進めることが非常に重要と考える．この度のミッションは内発的な出来事に基づいたものではなく，外圧的要求に応えた形で策定されている．しかし，個人的には大学が自己とその足元である地域との関係を確認し，見直す良い機会になっただけでなく，個人研究を基本とする大学教員に組織研究というこれまでとは違うスタイルを求めつつ，学部の力を示し，地域での存立意義を各自が持つ機会になったと考える．“災い転じて（？），福となす”かもしれない．

最後になったが，生物資源科学部研究報告19号の発刊に当たり，原稿をお寄せ頂いた先生方ならびに発刊のためにご尽力頂きました学術委員会と事務の皆様には厚くお礼を申し上げる．